巻頭言

社会福祉の今日的課題

関西学院大学　神野　直彦

「百年に一度の危機」と呼ばれるような「大危機」は，一つの時代の終わりと，一つの時代の始まりを告げている．前回の「百年に一度の危機」である 1929 年の世界恐慌は，イギリスを中心とした世界秩序，つまり「パクス・ブリタニカ」が終わりを告げる危機であった．「パクス・ブリタニカ」とは軽工業を基軸とする産業構造を基盤にした「自由主義国家」という「小さな政府」によって形成された世界秩序である．

今回の「百年に一度の危機」は，第二次大戦後に形成されたアメリカを中心とする世界秩序である「パクス・アメリカーナ」の終わりを告げる「大危機」である．「パクス・アメリカーナ」とは重化学工業を基軸とする産業構造を基盤にした「福祉国家」という「大きな政府」によって形成された世界秩序である．

もっとも，歴史の転換期である危機の前後では，古きものと新しきものが楔形に交錯する．「パクス・アメリカーナ」の崩壊は，1973 年の石油ショックとブレトンウッズ体制の崩壊を象徴として始まっている．そのため 1970 年代後半から，「福祉国家」という「大きな政府」を根源的に否定し，「自由主義国家」という「小さな政府」を復古させることで，「パクス・アメリカーナ」の復権を果そうとする新自由主義が世界史の表舞台に躍り出てくる．

今回の「大危機」の新自由主義の足掻いた「危機の 30 年」に晩鐘を鳴らしている．もっとも，「危機の 30 年」には新しき流れも形成される．確かに，「福祉国家」を実現させた状況は変化し，「福祉国家」は行き詰まっているけれども，「社会福祉」を重視するという「福祉国家」のメリットを生かしながら，新しいモデルを模索するという流れである．

こうして第二次大戦後に「福祉国家」を目指すことに収斂していた先進諸国は，新自由主義が踊った「危機の 30 年」には，「社会福祉」を巡って分岐していく．一つは「福祉国家」をかなぐり捨て，「小さな政府」を目指すアメリカ・モデルである．もう一つは，「福祉国家」を重視した「社会福祉」の再編を目指すヨーロッパ社会経済モデルである．このヨーロッパ社会経済モデルには，二つのタイプがある．一つはヨーロッパ大陸モデルであり，もう一つはスカンジナビア・モデルである．

この三つのモデルの代表として，アメリカ・モデルでアメリカ，ヨーロッパ大陸モデルでドイツ，スカンジナビア・モデルでスウェーデンを取り上げ，これにアメリカ・モデルに含まれる日本を加えて，経済的パフォーマンスを示すと，表のようになる．この表では政府の大きさを「社会福祉」，つまり社会的支出で表示している．「小さな政府」とは防衛，警察治安，一般行政に特化した「夜警国家」であり，「大きな政府」とは「社会福祉」を

政府の大きさと経済的パフォーマンス

	政府の大きさ（社会的支出のGDP）	財政収支	格差（ジニ係数）	貧困率（相対的貧困率）	経済成長率
アメリカ	14.7%	△2.8%	0.367	14.8%	3.0%
ドイツ	27.4%	（△2.7%）	0.277	9.8%	1.2%
スウェーデン	29.8%	（　1.4%）	0.243	5.3%	2.6%
日本	16.9%	（△6.7%）	0.314	15.3%	1.4%

（注）政府の大きさ：2001年，格差：2000年，貧困：2000年のデータに基づく．財政収支と経済成長率は2001年から2006年までの平均．
（出所）OECDの資料に基づいて宮本太郎北海道大学教授の作成した資料より作成．

も政府機能として引き受けた政府だからである．

この表を見れば，アメリカと日本は「小さな政府」であり，ドイツとスウェーデンは「大きな政府」である．しかし，新自由主義が唱えるように，「社会福祉」を削減して「小さな政府」にすれば，経済成長が実現するというわけではない．確かに，「社会福祉」の小さなアメリカは，高い成長を実現しているけれども，日本は低い成長に喘いでいる．「大きな政府」のドイツも成長は低いけれども，「大きな政府」でもスウェーデンは高い成長を誇っている．

経済的パフォーマンスでは格差や貧困という社会的公正も重要である．格差や貧困ではジニ係数を見ても貧困率を見ても，「社会福祉」の小さなアメリカや日本は高く，格差や貧困を溢れ出させている．これに対して「社会福祉」の大きなドイツもスウェーデンも，格差や貧困を抑えることに成功している．

しかも，新自由主義は「社会福祉」を大きくすれば，財政収支の破綻をもたらすと主張する．しかし，「社会福祉」の財政収支は黒字であり，財政収支の赤字に苦悩しているのは，むしろ「小さな政府」である．つまり，「社会福祉」の大きな財政は持続可能なのである．

もっとも，「社会福祉」を大きくしても，経済成長の実現は困難な場合もある．それは一重（ひとえ）に，「社会福祉」の内実にかかっている．

ドイツの「社会福祉」の中心は依然として現金給付に重点がある．ドイツにしろフランスにしろ，ヨーロッパ大陸モデルでは社会保険のウェイトが高いという特色がある．

ところが，スウェーデンは「社会福祉」の内実を，現金給付からサービス（現物）給付へとシフトさせている．現金給付よりもサービス給付のほうが，労働市場への参加を促し，経済成長を高めることになる．

しかも，同質の筋肉労働を大量に必要とした重化学工業の時代が終ると，サービス産業や知識産業の労働市場に，女性も大量に進出するようになる．そうした産業構造の転換期に，育児や養老などのサービス給付が提供されないと，労働市場がパート労働市場とフルタイム労働市場に二極化する．もちろん，こうした二極化した労働市場は，格差と貧困の溢れる砂時計型社会をもたらす．つまり，格差も貧困もスウェーデンがドイツよりも大幅に解消しているのも，「社会福祉」がサービス給付にシフトしているからである．

もちろん，こうした「社会福祉」のサービス給付では再訓練，再教育という積極的労働市場政策がある．ドイツでは労働市場への規制を緩和せずに，雇用を保障しようとするけれど，スウェーデンでは積極的労働市場政策というサービス給付で雇用を保障しようとする．

つまり，スウェーデンでは旧来型産業から成長

産業へと労働を移動させることで，経済成長を実現している．ところが，アメリカも日本も積極的労働市場政策への支出は極端に少ない．それにもかかわらず，労働市場への規制緩和をしている．それは産業構造を転換することなく，賃金を低めて，経済成長を図ろうとするからである．

古き「福祉国家」の時代が腐臭を放って崩れ落ちようとしていることを忘れてはならない．しかし，新しき時代は「社会福祉」の内実をサービス給付へとシフトさせるように再編することなくしては形成できない．「社会福祉」の縮小が過去の暗き冬の時代に連れ戻すだけだということを，嫌というほど学習したはずである．そうだとすれば，「社会福祉」の内実の大転換こそが，危機克服の戦略として問われている．